

横須賀高校創立九十周年記念式典 「式辞」

長く暑い夏も終わり、日ごとに秋も深まり、鮮やかな紅葉が待ち遠しい季節となりました。本日、この良き日に、愛知県教育委員会委員長職務代理者・岩月慎自様、愛知県議会議員・佐波和則様、東海市長・鈴木淳雄様、東海市教育長・加藤朝男様、同窓会およびPTA役員の皆様、歴代校長先生はじめ旧職員の皆様など、多数のご来賓の皆様のご列席をいただき、愛知県立横須賀高等学校・創立九十周年記念式典をかくも盛大に挙行できますことは、大きな喜びであります。教職員を代表し心より御礼を申し上げます。

今、我々を取り巻く社会を眺めてみると、これまでに経験したことがないような大きな出来事が起こっています。一昨年三月には、東日本大震災と原子力発電所の大事故が発生し、東北地方の復興が国家的な課題となっています。また、昨年末の衆議院選挙において、国民が「日本経済の再建」を第一に求めたことにより、再び政権交替が起こり、アベノミクスとも呼ばれる金融・財政政策により、リーマンショック後の経済の停滞を含めた、日本のデフレ経済からの立て直しが急ピッチで進められています。併せて、どの時代にも最大の課題の一つである教育問題にも新たな方向が示されつつあります。

このような時代に、学校教育はどうあるべきか、本校の十年後、二十年後の姿はどうあるべきか。そのヒントは、本校の九十年の歴史を振り返ることから得られるのではないかと考えました。そこで、本校の歴史を記した冊子「わが校の歩み」から、本校が設立された当時の様子や、その後の変遷について、本日も列席の皆様と一緒に振り返ってみたいと思います。

大正十一年、教育の拡大と女性の地位向上が求められたことを背景として、知多郡会は、女子教育振興のため、知多郡西部に高等女学校を設立する計画に対して補助金を出すことを決議しました。これを受けて、その翌年の大正十二年四月、当時の横須賀町長、橋本遼太郎氏らの努力により、本校は、横須賀尋常高等小学校（現在の横須賀小学校）の校舎の一部を仮校舎として、町立の高等女学校として産声をあげました。

この年、大正十二年の九月、我が国は関東大震災に見舞われ、十万人を超える人々が命をなくし、国民生活は困窮を究めていました。さらに、昭和四年には、ニューヨーク株式市場の株価大暴落を契機として、世界中が経済大恐慌に陥るとともに、戦争の影が忍び寄るなど、大きな歴史的な転換点となりました。大きな社会不安が募る中で、本校は、町当局・学校関係者の努力により、苦心して学校運営を進め、昭和十四年には、当時の保護者・卒業生・学校関係者の有志が加わり「県営移管助成同盟会」を設立し、募金活動を開始したとのことです。

戦時色の強まる昭和十五年、本校は、念願の県営移管を果たし、県立の高等女学校となりましたが、第二次大戦の激化に伴い、穏やかだった女学校生徒の生活も、校庭の整地作業に加えて、食糧増産の確保、尊農精神の涵養、心身の鍛練のため農園作業が行われ、さらに勤労働員に赴くなど、昭和二十年の終戦まで忍耐を強いられるものでした。その後、戦後の混乱の中、昭和二十三年の学制改革により、本校は、小学区制、男女共学制、総合制による愛知県立横須賀高等学校となり、名古屋地区・半田地区などの旧制中学から元気の良い男子生徒が大挙転入し、現状への不満と進路への不安を取り除き、学力差を解消して生徒や保護者の期待に応えることが急務であったとのことでした。

その後、昭和二十八年には、生徒数の大幅な増加により、施設・設備の充実整備を急ぐ必要に迫られていたことから、地元の学区内六町村とPTAが一丸となって全面的な新築移転の実現に努力し、県当局・県教育委員会の理解と指導により、現在の校地、高横須賀町広脇へと新築移転する運びとなりました。移転先の里山に段々に切り開かれた土地には、赤瓦の木造の校舎が建設され、旧校舎から新校舎への移動のため、生徒は、机や腰掛を延々と長蛇の列をなして運び、戸棚などは、生徒の家から車を借りて運搬したとあります。翌二十九年には、PTA寄贈の木造図書館、翌三十年には、プレコン造りの二階建て本館が造られ、現在の校舎の原型が完成しました。

さらに、昭和四十年代の急速な経済成長に伴い、高校進学希望者が急増し、県内で多くの新設高校が開設される中、本校は、昭和四十三年度には家政科の、昭和四十六年度には商業科の募集停止を行い、昭和四十八年度からは普通科単独校となりました。これ以後、知多半島の新設高校と地元中学校との教育連携により、本校には進学しづらい時期が続きました。この間、本校は、東海市、大府市、知多市から進学する生徒が中心で、これまで以上に進路実績が求められた時代でした。この時代、生徒は仲間意識が強く、エネルギーに溢れ、部活動や学校祭、とりわけ体育大会には熱心に取り組み、横高伝統の生徒全員応援の形が出来上がったのもこの頃です。その裏には、熱心で協力的な保護者のご理解とご尽力があったことを付け加えさせていただきます。

その後、平成元年に愛知県の公立高等学校入学者選抜が複合選抜入試制度となり、2校受験が可能になったことにより、再び知多半島一円、名古屋地区からも、意欲溢れる多くの生徒が再び横須賀高校に入学するようになり、現在に至っています。

このように本校の長い歴史を振り返ってみますと、どのような時代状況の中でも、地域の保護者や同窓生の皆様からの、絶大なるご理解とご支援を頂きながら、その期待に応えるべく、校訓「質実剛健、勤勉努力、親切奉仕」に込められた建学の精神を受け継ぎ、生徒と教職員の切磋琢磨により、伝統に新しい

息吹を吹き込みつつ、「文武両道」を目指して、努力を積み重ねてまいりました。現在、校門から眺めると、当時の里山に造られた赤瓦の木造の校舎は、二度目の改築・新築により現在の校舎となり、山の上には、東海市の区画整理に合わせて、当時のPTAが所有していた土地を集めて、第二グラウンドが築かれました。このように本校の広大な校地には、坂道の両脇の南京ハゼ、運動場の二本の楠の大木、新武道場に寄り添う桜の古木、校内全域を見渡すメタセコイヤの巨木が聳え立ち、私たちの学校生活に安らぎを与え、伝統の重みを感じさせてくれます。

この「素晴らしい学校の環境」こそ、先人の苦労の上に完成した財産、本校が、将来にわたって守り続けるべき大事な財産であると思います。また、校内を巡ると、あちこちの教室から教職員の熱のこもった声が、授業後のグラウンドや体育館からは部活顧問の叱咤激励の声が聞こえてきます。これらに応える生徒の姿は、頭を高く上げ、眼差しは真剣そのものです。教師と生徒の「物事に対する真摯な取組」こそ、本校が、将来にわたって守り続けるべき大事な校風であると思います。このように校訓に込められた建学の精神は、創立九十年目となる今日まで、二万五千人有余の卒業生に脈々と受け継がれてきました。今後ともこの良き伝統に、新しい息吹を吹き込み、「堅実で爽やかな校風」を維持してまいりたいと思います。

最後になりましたが、本校の更なる発展のために、生徒と教職員の精進努力と相まって、県教育委員会のご指導、地元東海市のご理解とご協力、同窓会とPTAの皆様のご支援をお願いできれば幸いです。その意味でも、本校の教育活動に対して、皆様から、これまで以上に叱咤激励をいただきますようお願いいたしまして、式辞とさせていただきます。

平成二十五年十一月三日

愛知県立横須賀高等学校長 森田耕治